

青森県上北郡に存在した高森鉱山の鉱山史

島口 天¹⁾

The history of Takamori Mine in Kamikita-gun, Aomori Prefecture

Takashi SHIMAGUCHI

Key words : 昭和 10 年代, 青森県上北郡, 高森鉱山, 上北鉱山, 鉱山史

1 はじめに

高森鉱山は、上北郡天間林村（現七戸町）西部の大坪川上流域に、上北鉱山と隣接して稼行していた鉱山であるが、全国的によく知られている上北鉱山に対し、県内でもほとんど知られていない。筆者は、青森市東部の東岳で稼行していた複数の鉱山の鉱山史について調査を行った際、東岳南西麓の滝沢に高森鉱山の索道・選鉱場・軌道があったことを知り（島口、2011）、同鉱山について調査を進めた。同時に、同鉱山と上北鉱山との関係についても調査を行い、昭和 12～18 年版東奥年鑑（東奥日報社、1937；1938；1939；1940；1941；1942；1943）、渡辺（1944）、日本鉱業株式会社（1957）、帝国鉱業開発株式会社（1970）、今田編（1977）、天間林村史編纂委員会（1981）等から得られた情報を総合し報告した（島口、2012）。これにより高森鉱山の概要は判明したが、不明な点も多いことからその後も調査を継続していた。

継続調査では、新たな文献や昭和 10 年代の新聞記事から高森鉱山や上北鉱山に関する記載・記事を探す作業を行い、電気探鉱調査報告や東奥日報から、十分とはいえないものの不明な点を補う情報を得ることができた。本報告では、島口（2011）に新たに得られた情報を加えて考察し、高森鉱山の鉱山史と上北鉱山との関係について述べる。

2 新たに得られた情報及び考察

文献及び昭和 10 年代の東奥日報の記事から高森鉱山及び上北鉱山に関する部分を引用し、考察を加えて記す。なお、引用した部分は『 』で囲んで表示するが、旧漢字は新漢字に、難読漢字は平仮名に直し、文章表現も意味が変わらない程度に現代の表現に直してある。

■明治末～大正初め

高森鉱山に関連する新聞記事として、昭和 18 年 8 月 14 日発行の東奥日報に『この鉱山が最初発見されたのは大正 2、3 年頃で、秋田小坂からの探検技師が探しあて、田中鉱業に売却したもので、当時は上総掘り等のいわゆる原始採掘で、業績も不振であったのである』と記載がある。

島口（2011）では、今田編（1977）の『明治末より大正初めにわたり藤田鉱業の技師により採鉱され、その有

望さが認められたが、当時の交通が不便で開発が困難であることから、企業として経営されるに至らず』という記載に対して、「藤田鉱業」は大正 6 年に合名会社藤田組から鉱山部門が分離されてできた「藤田鉱業株式会社」である可能性が高いことを指摘し、最初は大坪川上流域で鉱石を採鉱したのは「合名会社藤田組鉱山部門の技師」と報告した。これと新聞記事を合わせて考察した結果を次に述べる。

鉱山が発見されたのは、「大正 2、3 年頃」と「明治末より大正初め」という記載から年を断定できないため、両者を合わせて「大正時代の始め頃まで」と考える。鉱山を発見したのは、「秋田小坂からの探検技師」が「秋田県小坂町の小坂鉱山の技師」であると考えれば、小坂鉱山は藤田組が経営していたため、先述のとおり「合名会社藤田組鉱山部門の技師」として問題はないと思われる。その場合、発見した鉱山を田中鉱業に売却したのは、藤田組ということになる。

田中鉱業が行っていた上総掘りは、井戸を掘る際の代表的な工法であることから、採鉱というよりは探鉱を行っていたと考えられ、交通の便が悪いこともあり開発には至らなかったと思われる。

■昭和 10 年（1935）

この年の高森・上北両鉱山に関連する新聞記事として、次の①・②を記す。

① 昭和 11 年 11 月 27 日発行の東奥日報から

『高森山一帯の岩石が硫化鉄、銅、亜鉛、銀、金などの金属を多分に含有していることに着目した福島県平市の財産家三井栄一氏は、昨秋 10 月から探鉱に着手』

② 昭和 13 年 6 月 12 日発行の東奥日報から

『昭和 10 年 10 月、本県上北郡天間林村を中心とする鉱区の開発に乗り出した高森鉱山』

島口（2011）では、今田編（1977）、日本鉱業株式会社（1957）及び三井栄一に関する調査結果から『この年、三井栄一が社長を務める高森鉱山株式会社が、上北鉱山及び高森鉱山の鉱区一帯を所有することになり、三井栄一が進めた探鉱や新露頭の調査等によって上北鉱山本坑硫化鉄床が発見されたと考えられる。』と報告した。これと①・②を合わせて考察した結果を次に述べる。

①・②から、この年の 10 月に高森山一帯の探鉱が始ま

1) 青森県立郷土館主任学芸主査（〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14）

ったのは確実だと思われる。三井栄一は、昭和12年発行の人事興信録第11版下では『高森鉱山経営主』、昭和14年発行の同第12版下では『高森鉱山(株)社長』である。よって、この年の10月の時点で、三井はまだ会社を興しておらず、探鉱は三井が始めたと考えられる。また、10月に開発が始まったということから、「上北鉱山本坑硫化鉱床が発見された」のは、この年のことではない可能性がある。

■昭和11年(1936)

この年の高森・上北両鉱山に関連する新聞記事として、次の①～④を記す。

① 11月27日発行の東奥日報から

『(三井栄一氏は) 大体1年の探鉱試験の結果、将来有望との見通しがついたため、いよいよ本格的に事業の遂行に邁進せんとし、同所にこの夏までに事務所を建築、さらに山神社を付近山腹に建設。山神祭を地方有志、関係者等約300名を招き、去る23日に盛大に行った。現在、ここに付近各村から集められた坑夫として働いている者が130余名に上り、70名は銅鉱、60名は硫化鉄鉱の採掘に従事しているが、この原鉱は野辺地営林署の軌道を利用しガソリントロッコによって乙供駅に運び、さらに東北本線で野辺地港に運搬、ここより運送船で各地の精錬所に販売する予定になっている。』

② 12月2日発行の東奥日報から

『原鉱運搬方法に非常に不便を感じ、高森鉱業所でも便利な方法を追求中であつたが、結局500万円の資本金で株式会社を創立し、鉱山専用の鉄道を現場から青森港まで敷設し、直接海路を使つて移出する計画が進められ、まず第1期工事として現場から東岳、原別を経て野内まで13里の普通鉄道(60ポンドレール使用)を敷設し、無尽蔵に埋蔵されてある硫化鉄鉱、銅鉱、亜鉛鉱、金銀鉱の原鉱を続々移出するはずで、すでにこの鉄道敷設計画は県の認可を得、目下所轄省に認可申請中で、測量も徹底を期して行われている。』

③ 昭和12年1月1日発行の東奥日報から

『この鉱山は予想外に鉱業界から有望視され、すでに日本鉱業株式会社がボンと150万円を投げ出して、昨秋から向う6年間鉱区の一部の採鉱権を買収し、さらにこの地方の鉱業景気に拍車をかけている。』

④ 昭和13年6月12日の東奥日報から

『昭和11年10月、高森鉱山の隣接鉱区の開発に着手した上北鉱区』

①・②から、三井栄一が約1年の探鉱を行った結果、高森山一帯に有望な鉱床があるという見通しがついたため、高森鉱山の事務所や山神社を建設し、11月23日に多くの関係者を招いて山神祭を行ったことがわかる。また、すでに130名ほどの坑夫が銅鉱や硫化鉄鉱を採掘しており、それを野辺地営林署の軌道を利用して乙供駅に運んでいたが、不便であるため鉱山専用鉄道を青森市まで敷設する計画を進め、測量を始めていたこともわか

る。

上北鉱山の方は、日本鉱業株式会社(1957)に『10月に、三井氏の委任により日本鉱業株式会社が上北鉱山の経営を始め、新たに立石、上の沢、奥の沢等に硫化鉱床を発見した』と記載があり、これと③・④を合わせて考察した結果、上北鉱山は高森鉱山の隣接鉱区として10月から開発が始まり、日本鉱業株式会社が向こう6年間の鉱区の一部の採鉱権を買収し、三井の委任により経営を始めたと考えられる。「新たに立石、上の沢、奥の沢等に硫化鉱床を発見した」ということに関しては、10月に開発が始まったことから考えれば、この年のことではないと思われる。一方で、昭和10年の欄に記した「本坑硫化鉱床が発見された」のはこの年のことで、発見した本坑硫化鉱床の採鉱権を日本鉱業株式会社が買収し、開発が始まったと考えられる。

■昭和12年(1937)

この年の高森・上北両鉱山に関連する新聞記事として、次の①～⑧を記す。

① 1月21日発行の東奥日報から

『(高森山一帯に)埋蔵されている鉱石を青森市經由または青森港を利用して輸送するという計画はいよいよ具体化し、20日に鉱業所長の斎藤助蔵氏が千葉市長を訪問。鉱山から鉱石を軽便鉄道で浪打駅まで輸送する関係上、浪打駅を貨物駅として拡張するため鉄道用地を寄付してほしいと交渉』

② 3月21日発行の東奥日報から

『17日に鉄道省から仙台鉄道局に回送されて来た請願書の内容は、高森山から硫化鉄鉱を採掘し、軌道を使って浪打駅まで運んだ後、貨車に積替えて青森駅に運び、同駅から船積みにして朝鮮、満州方面へ輸送したいので、高森山から浪打駅まで軌道を敷いて欲しいというものである。』

③ 6月1・2日発行の東奥日報から

三本木支局の峯生記者による「高森・上北両鉱山探訪記(上)」、「同(下)」が掲載されており、5月20日から1泊で七戸警察署長の視察に同行した際のことが次のように記されている(抜粋)。

『森林軌道車を待つ事一時間余り、木炭ガス利用の森林軌道車に次いで、鉱山用のガソリン軌道車がやって来た。古い自動車の車体をトロヘ据付けたもの。』、『鉱山までは約3時間かかる』、『終点の高森鉱山に着いたが、坪川と野内川との分水嶺に近く、この辺り断崖絶壁の峡谷迫り、わずかの広場を利用し坪川を挟んで事務所、合宿所、購買部、学園、倉庫、飯場、発電所、北方高台には高森神社を祀り、西方約1里の山道を経て同鉱山の坑道、選鉱所、飯場、家族住宅がある。西南方約20町の急坂を登れば高森鉱山との共同経営になる日本鉱業会社の上北鉱山があり、ここにもまた事務所、合宿所、購買部、倉庫、工場、飯場、家族住宅数棟等があり、両鉱山とも種々の建物をどんどん建築中』、『現在既に両鉱山事務所

職員始め鉱夫、選鉱夫、工場員、雑役夫、購買部員、これらの家族を合わせて 300 名近く住宅、飯場の増加に従って続々入り込んでいる』、『(上北鉱山の) 工場には 66 馬力のディーゼルエンジンが 2 台、コンプレッサー（空気圧搾機）が 2 台、発電機等が据え付けられている』、『坑道入口は目下のところ 4 つあるが、坑内は鉱脈をたどって上下左右に坑道が切り開かれ、着々と採鉱に着手している。採鉱量月 25,000t と見て鉱山事務所では運搬方法を研究しているが、森林鉄道のみでは搬出困難なので、山頂より西北へ一直線に東北線野内駅へ鉄索を設け、これにより移送鉄道の便あるいは積取船で大阪の大日本人造肥料会社の工場へ輸送する事になり、着々と工事中である。さらに、単に採鉱作業のみでなく、特に技術課を設けて採鉱帯の発見に努力し、現にダイヤモンドボーリングをもって付近一帯の試験を行っている。』、『上北の硫化鉄鉱に対し高森は銅を主とし、金・銀ことに亜鉛を有望としているが、すでに今春、融雪以来銅を採掘選鉱し、秋田県椿鉱山に送り、精錬を行っている。選鉱したる銅鉱は、森林鉄道をもって東北線乙供駅より積み出しているが、今後、活発な採鉱が開始されれば到底森林鉄道では能力がないので、青森市浪打駅に至る 24km に地方鉄道を敷設し、この連絡によって単に鉱山用のみならず、この付近一帯の国有林の伐採を行い木材運搬に利用。地方開発に資せんと計画し、すでに鉄道省に認可申請證書を提出中である。この地方鉄道は、資本金 300 万円をもって敷設を実現しようとするものであるが、半分は高森鉱山が負担し、半分を地元の地方資本家に出資をさることになっている。すでに今月始めに鉄道省の上野・池田両監督課員が来山、現場の踏査を行い実地測量も終了。認可あり次第、直ちに工事に着手するばかりになり、一部土地買収に手を染め、これが実現に至るまでは索道を設けて移送』、『上北の購買は、日本鉱業本社との直接取引で全部東京から配給されるが、高森は主として青森から、地元としては付近村落から青物類、野辺地町から魚類で、鉱山の建物には家屋税が賦課されないというから地元に対する恩恵の少ないのは真にやむを得ない。』

④ 7 月 29 日発行の東奥日報から

『高森鉱山では、かねて同所から青森市までケーブル及び専用軌道の工事中で、去る 4 月までに東郡東岳村大字滝沢部落まで軌道が開通したが、軌道は同部落大山祇神社大鳥居の直前を通過することになっていたの、部落民は氏神様の尊厳を傷つけるも甚だしい、予定線を変更して同神社裏を通過するようにしてもらいたい、さもない時は絶対工事をさせないと鉱山側に対し強硬な抗議を申し込んだため工事は行き詰まり、その間に東岳村長等が調停に入ったが解決に至らず、ついに 26 日手を引いて終わった。鉱山側は意を決し、27 日から工事を強行しようとしたので、いきり立った部落民 72 名が鉱山側人夫等と対峙したため、青森署が調停に努めた結果、軌道は予定通り工事し、そのため取り除く大鳥居の代わりとして

鉱山側が時価 300 円の大鳥居を建立したほかに金 500 円を寄付する条件でようやく円満解決した。』

⑤ 10 月 30 日発行の東奥日報から

『本社を東京丸ノ内に置く日本鉱業株式会社では、かねてから本県上北郡天間林村国有林内にある上北鉱山に硫化鉄が多量に埋蔵されていることに着眼し、仙台鉱山監督局から採掘の許可を得て数年前から多数の鉱夫を使用して採掘事業を開始していたが、鉱区は 2 鉱区に分かれ、このほかに採掘鉱区を中心として大小 30 余の試掘鉱区も所有しており、本県内における鉱山事業中最も大規模なものである。したがって採掘量もすこぶる多いが同地方は交通不便で、せっかくの採取鉱も運搬設備が完備していないため搬出不可能の場合が往々にあり、同社では今回、同鉱山専用の電気鉄索並びに軌道を敷設する事になり、これの敷地の貸付方を青森営林局に要望してきたので、同局では実地調査の結果、4 町歩余の面積を 12 年 10 月から 17 年 3 月まで 5 ヶ年間貸付することに決定した。採掘鉱は従来までは野辺地営林署の森林軌道を利用して現地から乙供駅に搬出し、それを野内海岸に運搬していたが、それでは搬出能力が小さいので、今回 20 万円の巨費を投じて鉄索及び軌道を敷設する事になったもので、搬出路完成の暁は、従来の鉱産額の倍余に上るものとされている。』、『今回敷設する電気鉄索並びに軌道が完成すれば、12 年度以降からはドンドン増産されるものと営林局では見ている。なお同鉱山は従業員 200 有余の世帯を包含しており、近くこれら従業員子弟のための小学校も開設するはずである。』

⑥ 12 月 11 日発行の東奥日報から

『東北本線乙供駅は最近、上北、高森両鉱山の開発により著しく活況を呈してきた』、『昨年度より漸次高森鉱山の銅鉱が営林局軌道を経て移出され、移入は食料品及び日用雑貨品が其の大部分を占めている。青森営林局の森林軌道は乙供駅構内を起点とし、天間林村内に入り西北方へ国道を越えて約 9 里、高森山頂上近くに達している』、『高森山終点に三井陽一（栄一の間違い）氏の経営の高森鉱山及び日本鉱業株式会社経営の上北鉱山があり、前者は銅鉱を主とし、後者は硫化鉄鉱を産出し、何れも極めて有望で、現場の採掘設備は何れも劣らざる大掛りな採鉱場、機械工場が設けられ、現在は作業に従事する鉱夫及びこの家族が両鉱山当局職員と共に 1,200 名を超え、活況を呈している。さらに高森鉱山では、高森山一帯の鉱脈を始め森林等の宝庫開発のため恒久的施設として同鉱山を起点とし、高森山西方東郡東岳村を経て青森市浪打駅に至る私設鉄道を多大の犠牲を払って敷設した事である。すでに工事は完成し、近く利用される事になっているが、これと相呼応して上北鉱山では同様東北本線野内駅から浪打へ約 1km の海岸へ鉄索道を建設し、共に鉱物の運搬を行わんとしている。』

⑦ 昭和 18 年 8 月 14 日発行の東奥日報から

『昭和 12 年 10 月に日本鉱業が高森鉱山の一部を買収

して上北鉱山と命名した』

⑧ 昭和 19 年 6 月 6 日発行の東奥日報から

『上北鉱山は昭和 12 年 10 月、日本鉱業株式会社が高森鉱山から買収』

④では、高森鉱山は鉱石を運搬するため、鉱山から青森市まで索道及び専用軌道を工事中で、4 月までに滝沢まで軌道が開通したと報じている。軌道や索道については、後述の昭和 13 年 6 月 12 日の東奥日報でも報じられており、この年は鉱山から滝沢まで索道、滝沢から浪打駅まで軌道の建設が進められていたと考えられる。これに関連して、①では浪打駅を貨物駅として拡張するための用地寄付を青森市に要望している。また、②・③では昭和 11 年の欄にもあったように、鉱山から浪打駅まで軌道を敷設する計画が進められていたようで、鉱山から滝沢までの索道は代替的な方法であった可能性がある。

③から、高森鉱山では選鉱した銅鉱を森林鉄道（野辺地営林署の軌道）で乙供駅へ搬出し、秋田県の椿鉱山に送って精錬を行っていたことがわかる。また、鉱山へ行く際も森林鉄道を利用し、古い自動車の車体をトロヘ据え付けた鉱山用のガソリン軌道車に乗り、約 3 時間かかっていたこと、高森・上北両鉱山には事務所、合宿所、購買部、倉庫、飯場、家族住宅等があり、さらに様々な建物を建築していたこともわかる。

③から、上北鉱山は 5 月 20 日の時点で高森鉱山と日本鉱業株式会社の共同経営であるが、⑦・⑧から、日本鉱業株式会社が 10 月に高森鉱山の一部を買収してできたことが考えられる。買収したのは、昨年、同社が採鉱権を買収したと考える本坑鉱床である可能性が高い。また、昭和 13 年の欄にある野口（1942）の『立石区域は上北鉱業所によって既に稼行中』ということから、立石区域も買収していた可能性がある。上北鉱山という名称は、新聞記事では以前から使用されていたが、正式に命名されたのはこの買収によってという考え方もできる。

③から、上北鉱山では硫化鉄鉱の採鉱が始まっていたが、高森鉱山同様、森林鉄道だけでは搬出困難であるため、野内駅まで索道を建設していたことがわかる。

⑤は、上北鉱山に関する記事となっているが、鉱石の搬出能力を高めるため索道及び軌道を建設するということが高森鉱山のことでありと考えられ、両鉱山を一緒にして上北鉱山と報じている可能性がある。

⑥は、乙供駅前に電話が開通したことを報じたものであるが、それを祝う広告を両鉱山が出しており、それには『高森鉱山鉱業所』、『日本鉱業株式会社 上北鉱山事務所』と記されている。この広告から、12 月 11 日の時点で高森鉱山はまだ株式会社経営になっていないこと、上北鉱山は日本鉱業株式会社の経営であることがわかる。

■昭和 13 年（1938）

この年の高森・上北両鉱山に関連する新聞記事及び調査報告として、次の①～⑤を記す。

① 6 月 12 日発行の東奥日報から

『上北鉱山の方は採鉱場より野内川西岸までの南道（索道の間違い）工事が既に完成し、目下試運転を開始しており、また高森鉱山の方は浪打駅より東郡滝沢部落に至る軌道は既に完成し、滝沢より採鉱場大坪川（天間林村）に至る索道工事も後一週間程度で完成をみるようになったので、鉄道省の認可があり次第（高森鉱山の方は浪打駅より国鉄にて青森駅西貨物ホームへ搬出するので鉄道省の認可が要る）両鉱山はそれぞれ 7 月上旬より本格的に鉱石の輸送を開始する段取りとなった。』

② 6 月 28 日発行の東奥日報から

『日本鉱業株式会社経営にかかる上北鉱山では、東郡野内村より元山（上北郡天間林村高森山）まで、鉄索を架設中でこの程完成。試運転の結果、すこぶる好成績であったので過日より本格的に鉱石の運搬を開始した。同索道は全長（行程）19km で、野内起動所より滝沢原動所、赤沢原動所、坪川屈曲所、立石屈曲所、元山停留所の 6 ヲ所に分かれており、700 個の搬器（鉱石運搬バケツ）が動いている。1 つの搬器には 500kg の鉱石が入るもので、元山（鉱山）停留所より一つの搬器が野内まで到着するに約 3 時間を要する。野内海岸まで運搬された硫化鉄鉱は汽船によって大阪まで運搬されるので、近日中に積取船が入港するはずであり、野内海岸も相当にぎわいを呈することであろう。』

③ 8 月 10 日発行の東奥日報から

『上北鉱山では昨年来工事中の鉄索が完成し、去る 6 月 12 日から硫化鉄鉱の原鉱搬出を開始している。鉄索の総工費は約 80 万円で、鉱山から東郡野内村野内川河口まで、同海岸から海路大阪、東京、朝鮮の各工場へ積み出しを行っているが、1 時間約 50t の搬出能力を有し、大体 1 日に約 500t で、鉱山の作業所も鉱夫住宅もようやく完備。衛生、教育施設もあり、鉱山設備としては経営の日本鉱業株式会社が誇る整然豪華なものである。』

④ 11 月 5 日発行の東奥日報から

『高森鉱山株式会社高森鉱山は、昭和 11 年 10 月、鉱区の開発に乗り出して以来、輸送機関その他全般にわたっての諸設備の完備に力を注ぎ、本年 10 月をもってほとんど完成。埋蔵鉱石の主たる硫化鉄鉱、銅鉱その他を採鉱。本格的作業に乗り出すことになり、計画中であった山神祭を 1 日午前 11 時半から同鉱山内高森神社で盛大に執行した。晴天に恵まれ、境内は神燈、万国旗等で飾り立てられ、鉱山内の勤務者家族総出の大賑わいであった。』

⑤ 高森鉱山で電気探鉱を行った調査報告（野口、1942）から関連部分を要約して記す。

『7 月 2 日から約 50 日間、高森鉱山の電気探鉱を行った。高森鉱山地区には、高森鉱山株式会社、日本鉱業株式会社経営の諸鉱区並びに三井氏個人所有鉱区等が錯雑している。電気探査は立石区域、奥ノ沢区域、大蓬区域、金ヶ沢区域で行われた。立石区域は上北鉱業所によって既に稼行中、奥ノ沢区域は上北鉱業所で探鉱中である。』

大蓬区域には2, 3の旧坑があるとされているが、所有等についての記述はない。金ヶ沢区域は高森鉱山によって稼行中である。探鉱の結果、立石・奥ノ沢両区域において鉱床が潜在する可能性が高いことがわかったが、大蓬・金ヶ沢両区域は調査期間の都合で十分な調査ができなかった。』

①・④から、高森鉱山では鉱山から滝沢までの索道、滝沢から浪打駅までの軌道がほぼ完成し、7月上旬から本格的に鉱石を搬出できるようになったことがわかる。また、10月をもってほとんどの設備が完成して本格的作業に乗り出すことになったことから、11月1日に高森神社で山神祭を盛大に行ったこともわかる。

上北鉱山では、5月30日に上北鉱山と野内港の間に索道が完成（日本鉱業株式会社、1957）。②・③から、索道の試運転の後、6月末頃から本格的に鉱石の運搬を開始したことがわかる。また、索道では1つあたり500kgの鉱石が入る搬器が700個動いており、1日に約500tの鉱石を運んでいたこと、野内浜に運ばれた硫化鉄鉱は、海路で大阪や東京、朝鮮の各工場へ送られていたこともわかる。

⑤の7月から行われた電気探鉱の結果、上北鉱山が探鉱中の立石区域と探鉱中の奥ノ沢区域で、鉱床が潜在する可能性が高いことがわかった。この後、立石区域では昭和14年に豊富な硫化鉄鉱床が、奥ノ沢区域では昭和16年に高品位の銅鉱床が発見される。

■昭和14年（1939）

この年の高森・上北両鉱山に関連する新聞記事及び調査報告として、次の①～④を記す。

① 1月10日発行の東奥日報から

『高森鉱山飯場小屋が9日午前2時頃雪崩に遭い倒壊。就寝中の入夫6人が下敷きとなり圧死した』、『圧死した入夫は同鉱山で使役している杣夫（木こり）とその家族と判明した。』

② 2月3～6日発行の東奥日報に掲載されていた高森鉱山職員のスキー遭難に関する記事を要約して示す。

『2月1日の午前9時頃、高森鉱山職員17名が、日帰りの予定で同鉱山から東郡濱館村田代温泉に向かったが、夜になっても戻らないため遭難したと見られた。2日の午後2時15分頃、4名が坪川探鉱所に生還した。3日の午後0時50分頃、東郡濱館村の上松沢発電所に1名が生還し、引き続きもう1名が生存のまま同発電所員に発見され収容された。午後2時頃、三階滝付近で1名が遺体で、引き続き上松沢上流でもう1名が遺体で発見された。4日の午前7時30分頃、七十沢上流で3名が遺体で、引き続き同所で1名が遺体で発見された。さらに午前11時頃、七十森山付近で3名の遺体が発見された。5日の午後2時30分頃、柴森山西方の一本杉付近で2名が遺体で発見された。これで遭難した17名中、生還者6名、死者11名という大惨事となった。』

③ 12月7日発行の東奥日報から

『5日午後10時頃、日本鉱業株式会社所有、上北鉱山野内出張所鉱石貯鉱舎並びに機械工場の木造垂鉛葺建物中央部から出火』、『午後12時鎮火した。』

鉱舎はこの火事でほぼ全焼したようである。

④ 上北鉱山における物理探鉱の結果報告（小田・野口、1942）から関連部分を要約して記す。

『〔野口（1942）において〕昭和13年に行った電気探鉱により立石及び奥ノ沢区域に鉱床が潜在する兆候が示され、大いに有望である事が指摘されたが、昭和14年7月頃、立石区域で鉱山側が豊富な一大硫化鉄鉱床を発見した。』

高森・上北両鉱山に関する報道は、この年は①～③のような事故や事件以外特でない。これは、前年から両鉱山とも本格的な操業に入り、それが安定していたためと考えられる。報道はされていないが、④にあるように7月頃、立石区域で豊富な硫化鉄鉱床が発見されている。

天間林村史編纂委員会（1981）には、『上北鉱山分教場は白石小学校の分教場として、昭和14年に誕生した』と記載されており、この年の4月に、上北鉱山に白石尋常小学校上北鉱山分教場が開校した。

■昭和15年（1940）

この年の高森・上北両鉱山に関連する新聞記事は、次に記す6月7日発行の東奥日報に掲載された高森鉱山の特集記事のみである。

『高森鉱山は個人経営として創業したものであるが、昭和13年2月、資本金300万円の株式会社に組織。同14年10月、軍部方面の絶大なる後援を受けてモリブデン鉱の採掘を行っている資本金2,000万円の満州銅鉛会社の専務取締役たる北村民也氏が高森鉱山の有望なるを認めて投資をなし、北村民が社長に就任するに至ったものである。』、『高森鉱山の今日まではいわゆる採掘準備時代であったが、商工省の電気探鉱を2回にわたって試験した結果、断然優秀なる大鉱床の存在が立証され、鉱山雑誌にも発表され、硫化鉄鉱においては本邦一の名声を業界に伝えられるに及んで、会社側では大いに乗り気となり、いよいよ本格的採鉱に着手する事となったもので、今年も6月1日から商工省の電気探鉱隊が来県し試験を継続中である』、『第二期計画として500万円の予算をもってとりあえず浮遊選鉱場並びにダム（清水組で請負）を新設すると共に索道（日本索道会社で請負）の大改修断行と病院、学校、舎宅その他諸施設の拡充を行うこととなったものである。選鉱場並びにダムは滝沢村に新設されるものであるが、これが準備万端を終わったので鉄道、県・市当局、警察、主たる商工業者、地元有力者、鉱山関係者200余名を招いて、6日午前10時半から選鉱場、ダムの起工式を盛大に挙行了が、2ヶ年後には完成する予定であるから、完成後の高森鉱山の躍進振りは今から大いに期待されている。』、『鉱床は坪川、金ヶ沢、松ヶ沢、奥ノ沢の4鉱床、35鉱区よりなっており、現在はその一部だけ採掘しているに過ぎず、現在は主として

坑道の開削に全力が傾注されているが、新設の選鉱場並びにダムが完成すれば本格的採掘を行う手順になっている。『青森県に金を落とすことをモットーとしている高森鉱山では、まず県人の鉱夫を優先的に採用する方針を立てている』、『高森鉱山の誇りとするところは坑内の坑道は複線になっており、作業がすぶる簡便であることは東北地方鉱山に見られない設備であり、しかも坑内は岩層となっているので落盤の心配がないのも高森鉱山の将来性を語る一要素をなしているといえるだろう。』、『高森鉱山の就労鉱夫は約 600 名であるが、その家族を合すれば実に 1,000 名に上り、鉱夫達の子供等に教育する事の責任を痛感し、多大の犠牲を払って専任の教員、校舎を新築して鉱山学校を開設している。また病院も開設して鉱夫自身は無論、家族に対して無料で治療にあたっているばかりでなく、夫婦の鉱夫に対しては舎宅、独身者に対してはアパート式の住宅を無料で給する事、さらに慰安所としてクラブを設け、鉱夫並びに家族の心身の休息所としている。』、『高森鉱山の運搬設備は東北本線浪打駅並びに乙供駅を起点とする二つの軌道がある。浪打駅を起点とする軌道は東郡滝沢村まで通じ 8t のガソリンカー 2 台が運転されている。滝沢村より鉱山までは索道が通じており、鉱物はこの索道によって滝沢まで運搬され、滝沢より軌道によって浪打駅隣の青森出張所まで運ばれ、同所より秋田県の発盛精錬所と茨城県の精錬所に配給されている。一方乙供駅を起点とする軌道には 4t 半のガソリンカーが 4 台配置されており、この軌道は現在のところ鉱物の輸送を行わず、主として入山者並びに物資の運搬を行っている。浪打、乙供両駅には東北本線の同社引込線があり、毎日三列車の専用が可能になっているので将来の輸送能力は約束されている。』

この記事から、高森鉱山株式会社は昭和 13 年 2 月に、資本金 300 万円で設立されたことがわかる。このことは、先述の昭和 12 年 12 月 11 日発行の東奥日報掲載広告に『高森鉱山高森鉱業所』と掲載されているのに対し、昭和 13 年版の東奥年鑑（東奥日報社、1938）の会社広告に『高森鉱山株式会社』と記されていることから裏付けられる。さらに昭和 14 年 10 月には、北村民也が同社に投資をしたことで社長に就任したことがわかる。このことも昭和 14 年 1 月 1 日発行の東奥日報掲載広告に『高森鉱山株式会社 社長 三井栄一』と掲載されているのに対し、昭和 15 年 1 月 5 日発行の東奥日報掲載広告に『高森鉱山株式会社 社長 北村民也』と掲載されていることから裏付けられる。島口（2011）では、いつ・どのようにして社長が三井から北村に交代したのか不明であるとしていたが、これにより三井は昭和 13 年 2 月まで高森鉱山を個人経営し、その後、高森鉱山株式会社を興して社長を務めたが、昭和 14 年 10 月に社長を北村に交代したことがわかる。

高森鉱山の設備面では、滝沢に浮遊選鉱場とダムを新設、索道を大改修することにしたため、6 月 6 日に多く

の関係者を招いて選鉱場とダムの起工式を盛大に行い、それらが約 2 年後に完成することがわかる。これに関連して、この年の 8 月に発行された青森市誌の再刊である今田編（1977）には、『現在、滝沢に建設中の選鉱場完成次第、更に第二段の計画として大選鉱場の建設をなし、元山においては東北鉱山においてみることはできないほどの小学校現在建設中、10 月完成の予定』、『11 月末日に新設索道完成せられ、いよいよ運転開始し』と記載されていることから、索道の改修は 11 月中に終わる見通しであることがわかる。また、10 月完成予定の小学校に関連して、天間林村史編纂委員会（1981）には『高森分教場は坪小学校の分教場として、昭和 15 年に生まれ』とあることから、10 月完成予定の小学校は坪尋常小学校高森分教場だと思われる。さらに、この記事にある『校舎を新築して鉱山学校を開設している』というのは 6 月のことであるため、この時点ですでに高森鉱山には独自の鉱山学校があったことがわかる。

上北鉱山に関しては、日本鉱業株式会社（1957）の『5 月、日本鉱業株式会社は上北鉱山の鉱床の譲渡を受け』ということが、上北鉱山全体の譲渡を受けたということではなく、ある鉱床の譲渡を受けたということの意味すると考えられる。今回譲渡された鉱床は、高森鉱山にある 4 鉱床のうちの 1 つ、上北鉱山で採鉱を行っていた奥の沢鉱床と考えられる。

■昭和 16 年（1941）

この年の高森・上北両鉱山に関連する新聞記事はなかったが、上北鉱山で物理探鉱を行った調査報告（小田・野口、1942）には次のように記されていた。

『〔野口（1942）において〕昭和 13 年に行った電気探鉱により立石及び奥ノ沢区域に鉱床が潜在する兆候が示され、大いに有望である事が指摘されたが、昭和 16 年 5 月頃、奥ノ沢区域で鉱山側が豊富な一大硫化鉄鉱床を発見した。』

これに対し、日本鉱業株式会社（1957）には『奥ノ沢硫化鉄鉱床に接して高品位銅鉱床を発見し、以後産銅量は逐次増加』と記されており、発見されたのが「豊富な硫化鉄鉱床」と「硫化鉄鉱床に接する高品位銅鉱床」のどちらなのかかわからない。しかし、後述のように上北鉱山で高品位の銅鉱床が発見されるのは昭和 17 年 5 月頃なので、この年の 5 月に発見されたのは「豊富な硫化鉄鉱床」で、翌年にこの硫化鉄鉱床に接する高品位銅鉱床が発見されたとするのが正しいと思われる。

■昭和 17 年（1942）

この年の高森・上北両鉱山に関連する新聞記事及び調査報告はなかった。

島口（2011）では、高森鉱山に関して帝国鉱業開発株式会社（1970）から関連部分を要約し、『9 月 11 日より高森鉱山は、帝国鉱業開発株式会社の受託経営下に置かれることになる。帝国鉱業開発株式会社は、重要鉱物増資の国策担当機関として、政府半額出資のもとに特別法

に基づいて昭和 14 年に設立された会社である。高森鉱山は「含銅硫化鉄鉱の相当な埋蔵量を持つが、低品位で収支償い難く、また現在索道、選鉱場等一応の設備があるが、本格的開発にはなお相当多額の起業費を要し、民間経営ではその負担が覚束ない」ということで帝国鉱業開発株式会社の受託経営下に置かれることになった。』と報告している。

■昭和 18 年（1943）

この年の高森・上北両鉱山に関連する新聞記事は、次に記す 8 月 20 日発行の東奥日報に掲載された上北鉱山の記事のみである。

『（上北鉱山は）昨年 5 月まで銅の産出は全然なかった硫化鉄山であったが、調査隊の苦心は見事報いられ一躍我国の銅山番付の 7, 8 番に飛上る素晴らしい銅脈が発見された。品位も埋蔵量も申分なく選鉱する必要もないというほど見事なもので、大東亜戦勃発とともに現れたというのも鉱夫達は同鉱山を「神風鉱山」と名付け、目下夜を徹して採掘が行われている』

この記事から、高品位の銅鉱床が発見されたのは昭和 17 年 5 月頃だということがわかる。

島口（2011）では、高森鉱山に関して渡辺（1944）から『夏の状態として、高森鉱山専用軌道は使用が中止されている。』と報告し、このことは、昭和 18 年版の東奥年鑑（東奥日報社、1943）の会社職員録に記された帝国鉱業株式会社高森鉱業所に、青森の連絡先が記されていないことから裏付けられ、高森鉱山が帝国鉱業開発株式会社の受託経営下に置かれたことで浪打駅前の高森鉱山株式会社の青森出張所が閉められ、索道・選鉱場・専用軌道も使われなくなったと推定した。

■昭和 19 年（1944）

この年の高森・上北両鉱山に関連する新聞記事として、次の①・②を記す。

① 2 月 6 日発行の東奥日報に掲載されている日本鉱業株式会社上北鉱山事務所の広告から

『従来帝国鉱業開発株式会社にて受託経営中なりし高森鉱山株式会社高森鉱山は、昭和 19 年 2 月 1 日より弊社において同鉱山の経営一切を受託操業致すこと、相成申候に付ては向後一層の御支援と御鞭撻賜度此段通知に代え謹告仕候』

② 6 月 6 日発行の東奥日報から

『昭和 18 年度生産目標額を年度の終わらぬ本年 1 月に早くも突破、この 5 月には本邦第 1 位、我国の産銅量に新記録を打ち立てた鉱山がある。日鉱経営の本県の上北鉱山がこれで、軍需省では凱歌に輝く同鉱山の褒章伝達式を 5 日午前 10 時から同省次官室で挙行了た。』、『上北鉱山は昭和 10 年、硫化鉄鉱の山として発見され、同 12・13 年頃日本鉱業の経営得に移った。大東亜戦争勃発直後、高品位の優秀な銅鉱床を発見。』、『昭和 16 年の秋、銅が出そうな兆候があったので再三試掘を行い、17 年の 5 月から 9 月頃までに相当量のあることを確かめた。上北のは

選鉱しなくてもよいほどの高品位で、新しい鉱床もすでに発見されている。』、『同鉱山は昭和 12 年 10 月、日本鉱業株式会社が高森鉱山から買収後、品位優良の鉱石が産出されるようになったもので、逐年拡張し今や同鉱山は一小都市を形成し、各種の設備は日に月に完璧となり、同鉱山の国民学校分教場は本校である白石校より在籍数が多いという有様だ』

①から、高森鉱山の経営が、2 月 1 日に帝国鉱業開発株式会社から日本鉱業株式会社上北鉱業所に移ったとみることができる。島口（2011）では、帝国鉱業開発株式会社（1970）に『5 月 31 日、帝国鉱業開発株式会社による高森鉱山の経営受託が解除』とあることから、高森鉱山はこれが原因となって閉山したと推定したが、上北鉱山による経営に移ったことで同鉱山に統合されたと考えられる。日本鉱業に経営が移った月日と帝国鉱業開発による経営受託が解除された月日は同じだと思われるが、両者が異なっている理由は不明である。新聞読者等一般に広報した 2 月 1 日の方が、信頼度が高いと思われる。

島口（2011）では、天間林村史編纂委員会（1981）に『4 月より高森分教場は、上北鉱山国民学校に統合された。』と記されていることについて、学校名は「白石国民学校上北鉱山分教場」が正しいと思われるとした。高森分教場が 4 月から上北鉱山分教場に統合されたのは、高森鉱山が上北鉱山に統合されたためであり、②にあるように上北鉱山分教場の在籍数が本校の白石国民学校より多かったのも、それが理由だった可能性がある。

②から、上北鉱山の産銅量は、5 月にはすでに日本一になっていたことがわかる。また、日本鉱業株式会社（1957）に『9 月には、上北鉱山は月産銅量 1,400t を超え、当時本邦最大の銅山となった。』と記されているように、この年、上北鉱山は日本最大の銅山となった。

3 まとめ

昭和 10 年代に、上北郡天間林村（現七戸町）西部の大坪川上流域の高森山一帯で稼行していた高森鉱山と上北鉱山について調査を進めた結果から、高森鉱山の鉱山史と上北鉱山との関係について明らかになったことをまとめ、年代順に記す。また、地形図に記された両鉱山の設備やその変遷を図 1・3 に、東奥日報以外で確認されている高森鉱山唯一の写真を図 2 に示す。

昭和 10 年：10 月から、福島県平市（現いわき市）の資産家三井栄一が、高森山一帯の探鉱を始めた。

昭和 11 年：三井による約 1 年の探鉱の結果、有望な鉱床があるという見通しがついたため開発を始めることにし、高森鉱山の事務所や山神神社を建設。11 月 23 日に山神祭を行った。すでに 130 名ほどの坑夫が銅鉱や硫化鉄鉱を採掘しており、鉱石は野辺地営林署の森林軌道を利用して乙供駅に運んでいたが、不便であるため鉱山専用軌道を青森市まで敷設する計画を進め、測量を始めていた。上北鉱山の方は、本坑硫化鉄鉱床が発見されたこと

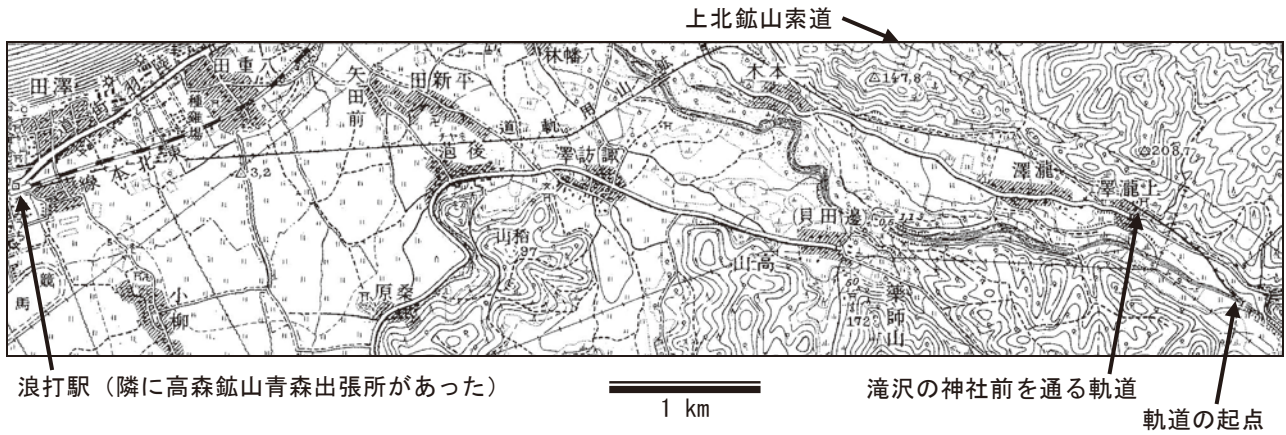


図 1 地形図に記された浪打駅と滝沢起点間の高森鉱山専用軌道

（昭和 29 年地理調査所発行 5 万分の 1 地形図「青森東部」の一部を使用）

この軌道は、昭和 17 年から同 32 年発行の地形図まで記されているが、その後は徒歩道として記され、現在でも地図上でその跡を部分的に確認できる。高森鉱山がこの軌道を利用して鉱石を運搬したのは、昭和 13 年の後半から昭和 17 年頃までと考えられ、8t のガソリンカーが 2 台運転されていたようである。起点から南東へ、高森鉱山まで索道が延びていた。

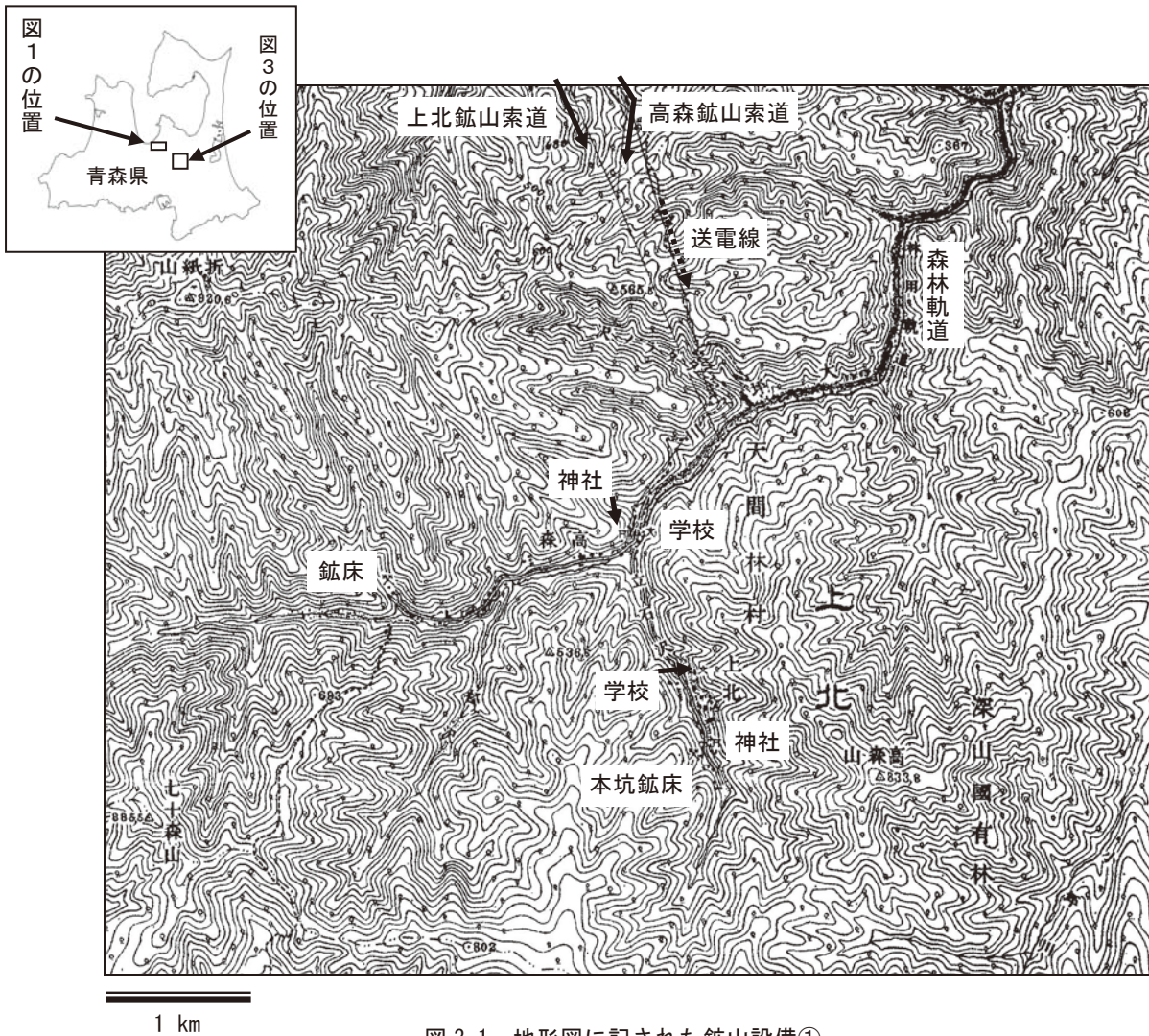


図 3-1 地形図に記された鉱山設備①

（昭和 17 年大日本帝国陸地測量部発行 5 万分の 1 地形図「青森東部」の一部を使用）

まだ高森鉱山・上北鉱山と記されておらず、索道も建設中であることから、昭和 12 年頃の様子を表していると考えられる。学校は、どちらも鉱山側で設置した鉱山学校と思われる。



図2 高森鉱山の写真

今田編（1977）に掲載されている高森鉱山株式会社の広告にある写真だが、撮影年月日や写っている人物等に関する情報は掲載されていない。掲げられている「鉱業報国」という言葉は、昭和11年11月27日発行の東奥日報に、高森鉱山の経営を始める際の三井栄一の方針のひとつとして記されている。このことから、この記事にある11月23日の山神祭の際に撮影されたもの、あるいは高森鉱山株式会社が設立されて本格的作業に入ることを祝った昭和13年11月1日の山神祭の際に撮影されたものであると考えられる。

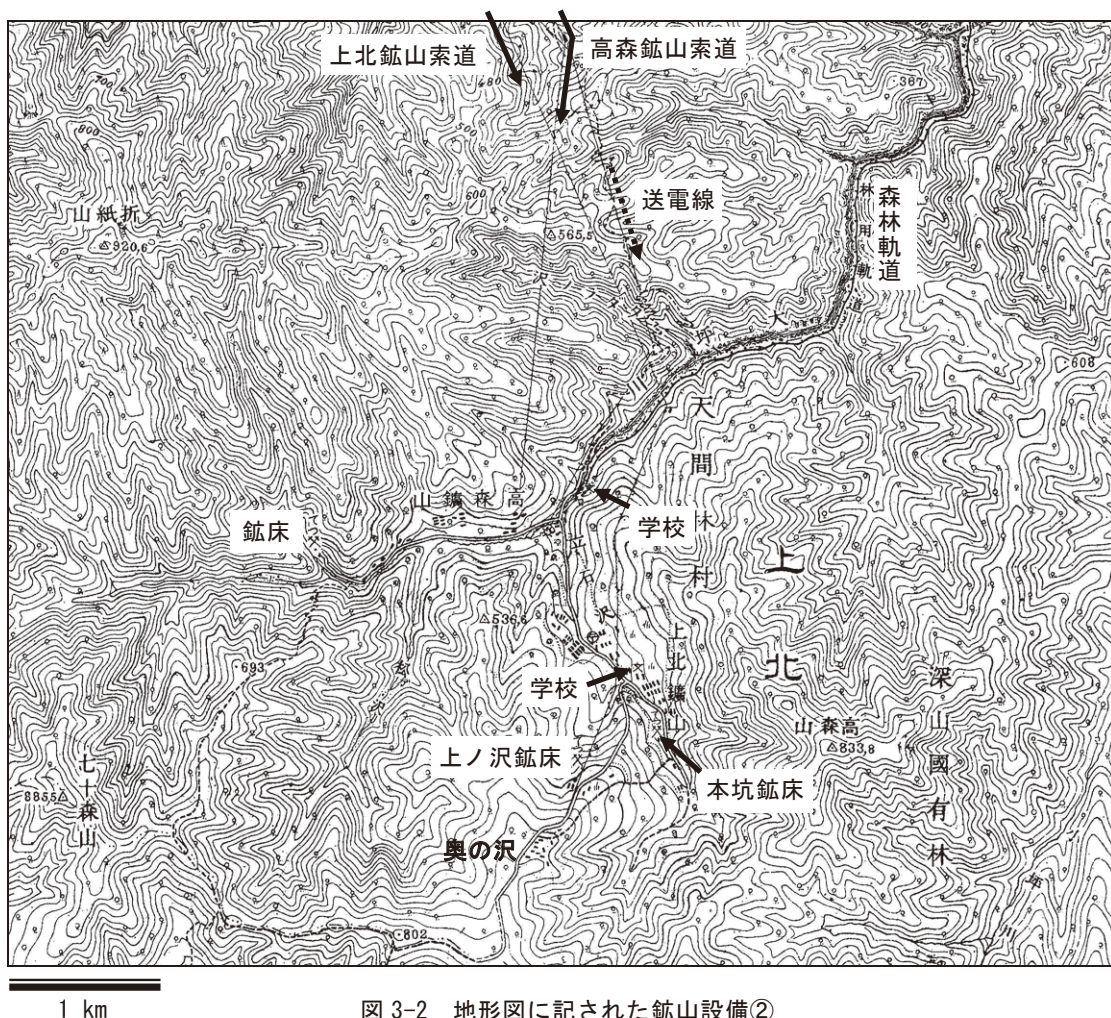


図3-2 地形図に記された鉱山設備②

（昭和29年地理調査所発行5万分の1地形図「青森東部」の一部を使用）

高森・上北両鉱山とも索道が整備されているが、高森鉱山の学校の位置が図3-1と同じであることと、上北鉱山に奥の沢鉱床がまだ記されていないものの奥の沢まで道路が延びていることから、昭和14年頃の様子を表していると考えられる。上北鉱山の方の学校は、白石尋常小学校上北鉱山分教場と思われる。

で10月から開発が始まり、日本鉱業株式会社が向こう6年間の本坑採鉱権を買収し、三井の委任により経営を始めた。

昭和12年：高森鉱山では、鉱山から滝沢までの索道、滝沢から浪打駅までの軌道の建設が進められており、浪打駅・滝沢間の軌道は4月には開通した。上北鉱山では、日本鉱業株式会社が採鉱権を買収していた本坑を、10月に高森鉱山から買収した。すでに硫化鉄鉱の採鉱が始まっていたが、高森鉱山同様、野辺地営林署の森林軌道だけでは搬出困難であるため、野内駅まで索道を建設していた。両鉱山とも事務所、合宿所、購買部、倉庫、飯場、家族住宅等があり、さらに様々な建物を建築していた。

昭和13年：2月に高森鉱山株式会社が設立されて三井栄一が社長に就任し、高森鉱山は同社の経営となった。高森鉱山から浪打駅までの索道及び軌道が完成し、7月上旬から本格的に鉱石を搬出できるようになった。また、10月をもってほとんどの設備が完成して本格的作業に乗り出すことになったことから、11月1日に高森神社で山神祭を盛大に行った。上北鉱山では5月30日に鉱山から野内港までの索道が完成し、試運転の後、6月末頃から本格的に鉱石の運搬を開始した。また、7月から行われた電気探鉱の結果、採鉱中の立石区域と採鉱中の奥の沢区域で、鉱床が潜在する可能性が高いことがわかった。

昭和14年：犠牲者が出た1月の高森鉱山での雪崩や2月の高森鉱山職員のスキー遭難事故、12月の上北鉱山野内出張所の鉱舎の火事など事件・事故が続いた。4月に白石尋常小学校上北鉱山分教場が開校した。操業の方は両鉱山とも順調であったようで、7月頃には上北鉱山の立石区域で豊富な硫化鉄鉱床が発見された。10月には、北村民也が高森鉱山株式会社の社長に就任した。

昭和15年：高森鉱山で滝沢に浮遊選鉱場とダムを新設し、索道を大改修することにしたため、6月6日に関係者200余名を招いて、選鉱場とダムの起工式を盛大に行った。索道は11月中に改修が終了。浮遊選鉱場とダムは2年後に完成予定。坪尋常小学校高森分教場が10月に開校した。上北鉱山では5月、高森鉱山にある4鉱床のうちの1つ、上北鉱山で探鉱を行っていた奥の沢鉱床の譲渡を受けた。

昭和16年：上北鉱山は5月頃、奥の沢区域で豊富な一大硫化鉄鉱床を発見した。

昭和17年：9月11日から高森鉱山が、帝国鉱業開発株式会社の受託経営下に置かれることになった。上北鉱山では、5月頃に高品位の銅鉱床が発見された。

昭和18年：高森鉱山の青森出張所が閉められ、索道・選鉱場・軌道が使われなくなった。上北鉱山では、銅鉱の採掘が盛んに行われていた。

昭和19年：高森鉱山の経営が、2月1日に帝国鉱業開発株式会社から日本鉱業株式会社上北鉱業所に移り、高森鉱山が上北鉱山に統合された。このため、高森分教場は4月から白石国民学校上北鉱山分教場に統合された。上北鉱山は、産銅量が5月にはすでに日本一となり、9月には月産銅量1,400tを超え、日本最大の銅山となった。

今回の調査を進める過程で、昭和10年代の東奥日報に掲載されている高森・上北両鉱山に関する記事は思っていた以上に多いと感じた。これほど紙面に登場する鉱山はほかになく、両鉱山に対する期待の高さを感じられた。特に高森鉱山は、本社は東京にあったが、青森県の鉱夫を雇い、青森県の資材・食料を購入することを基本方針としていたため、期待が高かったと思われる。

謝 辞

本報告をまとめるにあたり、青森県知的財産支援センターに資料の引用について助言をいただいた。記して厚くお礼申しあげる。

引用文献

- 今田清蔵編(1977) 青森市誌(附東津軽郡町村史)。株式会社歴史図書社、東京、pp.200(+292)。
- 日本鉱業株式会社(1957) 日本鉱業株式会社五十年史。日本鉱業株式会社、東京、pp.741。
- 野口 高(1942) 青森県高森鉱山電気探鉱調査報告。物理探鉱調査報告、3、p.11-31。
- 小田二三男・野口 高(1942) 上北鉱山に於ける物理探鉱に就て。日本鉱業会誌、691、p.701-712。
- 島口 天(2011) 青森市東岳における鉱山史。青森県立郷土館研究紀要、35、p.9-14。
- 島口 天(2012) 高森鉱山の沿革と上北鉱山との関連。青森自然誌研究、17、p.93-97。
- 帝国鉱業開発株式会社(1970) 帝国鉱業開発株式会社社史。株式会社金子出版、東京、pp.428+41。
- 東奥日報社(1937) 東奥年鑑 昭和12年版。pp.696。
- 東奥日報社(1938) 東奥年鑑 昭和13年版。pp.648。
- 東奥日報社(1939) 東奥年鑑 昭和14年版。pp.532。
- 東奥日報社(1940) 東奥年鑑 昭和15年版。pp.475。
- 東奥日報社(1941) 東奥年鑑 昭和16年版。pp.435。
- 東奥日報社(1942) 東奥年鑑 昭和17年版。pp.343。
- 東奥日報社(1943) 東奥年鑑 昭和18年版。pp.240。
- 天間林村史編纂委員会(1981) 天間林村史(下巻)。天間林村、pp.1593。
- 渡辺萬次郎(1944) 青森県東奥、大日本野内両銅山産瀝青銅鉱と粘土状銅鉱。岩石鉱物鉱床学会誌、31、p.195-209。